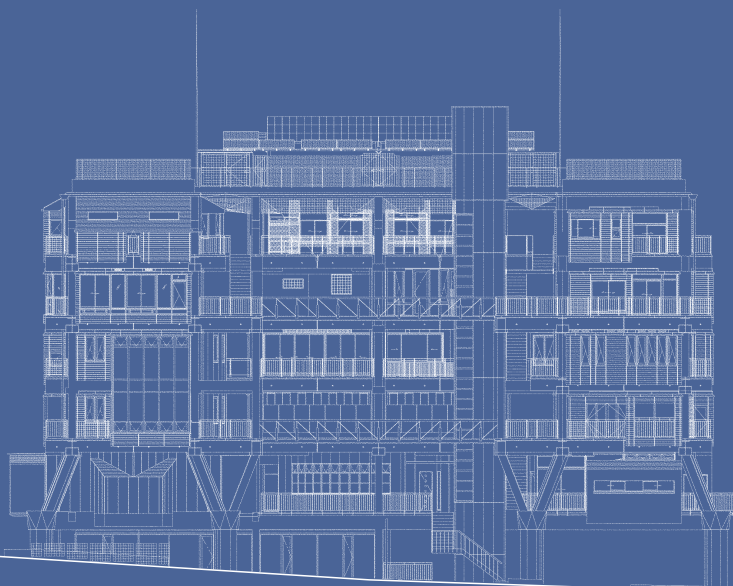


エネルギー・文化講座 — 実験集合住宅NEXT21シリーズ —



第1回「住まいのライフスタイル研究」

平成26年7月31日

グランフロント大阪北館8階ナレッジキャピタルタワーC (C07)

講演1「NEXT21の居住実験20年を振り返って～ライフスタイル研究の視点から～」

加茂 みどり (大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所 主席研究員)

講演2「ライフスタイルの商品化 ～住宅産業での空間開発の変遷を通して～」

中村 孝之氏 (積水ハウス株式会社総合住宅研究所 部長) (当時)

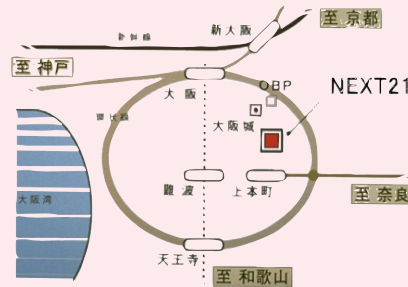
討論会

コーディネーター: 高田 光雄氏 (京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授)

「NEXT21の居住実験20年を振り返って ～ライフスタイル研究の視点から～」

大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所 主席研究員 加茂 みどり

NEXT21は、環状線の内側、大阪の都心部に位置する、地下1階、地上6階建ての鉄筋コンクリート造・18戸の集合住宅です。その各住宅にそれぞれ5年間、当社社員家族である居住者を入れ替えて実験を行っています。居住実験 20年を振り返り、ライフスタイル研究の視点から報告をさせていただきます。



■第1フェーズ:1994年～

ライフスタイル研究のスタート

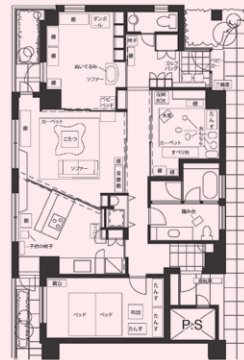
今までにライフスタイル研究の蓄積はなく、居住実験は全くのゼロからのスタートでした。とはいえ、まずはアンケート調査、ヒアリング調査、写真撮影とスケッチによる家具の配置図の作成といったことを淡々と進めました。最初に、第1フェーズのデータを使い分析した内容をご紹介します。

●第1フェーズ: A 子育て環境としての住宅の検討



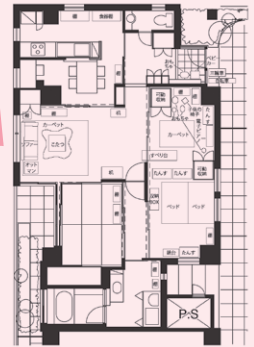
<リフォーム前>

- ・仕事場は納戸として使われていた。
- ・リビングルームやダイニングルーム、子供部屋の向こうに寝室があった。
- ×台所に西日が入りモノが腐りやすかった。
- 全部の引戸を開けると台所から家の中が一望できた。(子育てに都合がよいと好評)



<リフォーム後:変更箇所と背景ニーズ>

- ・家に入った正面にダイニングルームと台所。(←台所を北側にとのニーズ)
- ・和室をつつた。(←子供がごろごろできる和室のニーズ)
- ・ベランダを拡張。(←洗濯物の干しやすさ・子供のプール遊び・緑を置きリビングルームから見えるようにしたいとのニーズ)



<リフォーム後の住まい方>

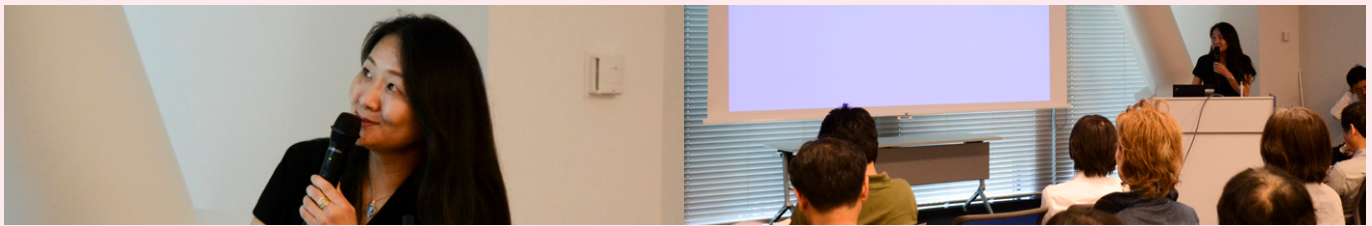
- ・ダイニングとリビングが住まいの中心となり、和室で就寝。
- ・東側の2室は、一方を子供部屋として主に玩具を、他方はほぼ納戸として使用。

この家は、もともとの設計は「仕事場のある家」というスタイルの住宅でした。玄関から入るとまず仕事場、そしてリビングルームと子供部屋。どちらも引戸で開け閉めででき、大空間としても使える。キッチンも引戸で隠すことができます。

しかしながら、入居者は大阪ガスの社員なので、まずワークスタイルとして家で仕事をすることはなく、居住者は妻と小さな子供2人という典型的な核家族でした。そこで、アンケート調査とヒアリングの結果、「子育てのために都合のよい、核家族のための家」にリフォームしました。

<この住宅で何をどう分析したか>

- ①まずヒアリングを毎年行いました。相手の方も世間話を交えて家や住み方の話をしてくださり、3時間くらいの間、ひたすら書きとめました。
- ②書き取ったヒアリング内容を全て、1つのコメントが1つの内容を表すように分けました。
- ③コメント全てに自分なりに「子育て」「家事」「都市空間に関すること」といったキーワードを付けていきました。
- ④それをエクセルの表にまとめて、ソートをかけ、「子育て」についての138のコメントを時系列で分析していったのがこの研究です。



<その結果、わかったこと>

子育て期の奥様、ご家族の関心というのは次の3つ—**①「遊び場」**を確保する/**②「子供の安全」**を守る/**③「子供の生活と家族の日常生活」**を両立させる—に大別でき、それぞれについてまとめてみました。

①「遊び場」の確保について

最初の1~2年目のヒアリングでは「どうしてNEXT21の中庭では遊べないんですか?」という声があがりました。環境に優しい住宅を目指し、中庭をエコロジカルガーデンにしていたので、居住者の方には立ち入り禁止となっていました。しかし、子育て中の奥様方にしてみれば、「マンションの中庭なんだから、ブランコとかがあっても当然でしょ」という声になったのです。とりあえず遊ぶ場所が欲しいというニーズは、リフォームの際に奥様が「プール遊びができる広いベランダ」を望まれたことから窺えます。

ところが、リフォーム後のヒアリングでは遊びの話が出ない。そして、「プール遊びしていますか?」と尋ねると、「全くしていない」とのこと。わけを聞くと、NEXT21の共用廊下は「立体街路」と呼び1.8mの幅があるのですが、そこが遊び場になっていたのです。入居時の「エコロジカルガーデンで遊べないのはおかしい」とか、リフォームの際の「ベランダを広くして欲しい」といった遊び場所がないことへのコメントは、退去時のヒアリングでは全く消えていました。子供は気軽に外に行ければいいんだということがよくわかる結果になっています。また一方で、親の目が届く一体的な空間が欲しいというのは一貫したニーズでした。住宅計画としては、子供部屋とリビング、台所とリビングの連続性を保ちつつ、気軽に外遊びができる広いベランダがあればいいのかなと結論づけました。

②「子供の安全」の確保について

ニーズとして高かったのは、転倒、転落、衝突を防止したいということでした。ところが、これも時系列で見ると興味深い変化が見られます。最初は「熱い炊飯器に触ってしまう」「オープン調理をすると熱くなり危ない」といった声がありますが、2年目、3年目になるとなくなります。子供の成長につれ、当然熱いところに近寄らなくなると心配はなくなるわけです。

ところが、リフォームの頃は子供が動き回る頃。よちよち歩きだった子供が、活発に動き回る3、4歳くらいになっていて、「転ぶと危ない」とか、「ドアが風にあおられて開くと当たるかもしれない」とか、「タオル掛けの位置が目の高さにあるから危ない」という声に変わります。そういった声にも応えたリフォームをしました。

さらにリフォームが完成すると、またコメントが変わります。「窓から落ちるかもしれない。ここの窓は危ない」となるのです。リフォー

ム時に要望がわかれば対応できたのですが、要するに子供が小さい間は、身長が高くなった時の危険性を予期できない。成長に伴って、それまで大丈夫だった窓の高さが「落ちるかもしれない」という危険を感じる高さになったということです。「安全性」の確保は高い関心事ではあるものの、場所や状況、子供の成長によってニーズが大きく変化することがよくわかりました。こういう短期的なニーズに、恒久的な措置としてどこまで施せばよいのかは、一考の余地があるのではと感じた研究結果です。

③「子供の生活と家族の日常生活」の両立について

小さな子供がいると家の中が散らかっておもちゃだらけになります。とはいえ、「子供がいても接客をしたい」「子供がおもちゃを散らかしっ放しでも、家族できちんと食事をしたい」「家事をしている最中に子供が寄ってきても大丈夫なようにしたい」、こういった日常生活と子供の生活の両立も非常に高いニーズになっています。

リフォーム後では、お客さんがある時には、接客する場所に依じてドアや引戸の開閉で、子供が食事できたり、おもちゃを全部放り込んで閉めたりと工夫できたことが、評価の高い点になっています。



<リフォーム前の住まい>



<リフォーム後の住まい>

●第1フェーズ: B

高齢小規模世帯(エンptyネスト)に対応した住宅の検討

「安らぎの家」(設計: 建築環境研究所) 134.64㎡



次のテーマとして取り組んだのが、「高齢小規模世帯(エンptyネスト)の住宅」でした。こちらの調査対象住戸は、「安らぎの家」とい

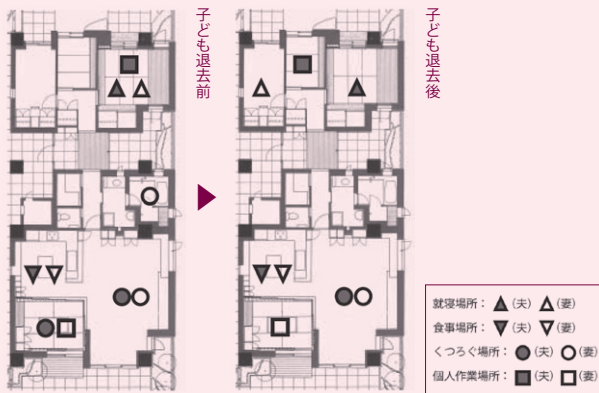
第1回「住まいのライフスタイル研究」

い、20代の子供と50代の夫婦という成人した大人の4人家族が住んでいます。最初のプランではプライベートゾーンとして北側に個室が並び、玄関や風呂、トイレをはさんで南側に居間と茶の間(和室)のパブリックゾーンがあるという配置です。

このご家族に予期せぬ劇的な変化が起こりました。入居2年目でご長男が転職、ほぼ同時にご長女が結婚して家を出られ、一瞬でエンピティネストの家族になったのです。また、ご主人も居住期間中にリタイアされました。それは研究にはチャンスだということで、生活がどう変わるかを丁寧に見てみようと考えました。



- ・プライベートゾーンである個室が並ぶ。
- ・玄関や風呂、トイレをはさんで、パブリックゾーンの居間と和室(茶の間)。
- ・家全体がパーソナル化。入居当初、会社から帰るとすぐに部屋に着替えていたお父様が、1日中ジャマで過ごされるようになった。



- ・子供の退去後(右)は、家全体が夫と妻のテリトリーに分化。食事場所とリビングルームを除き、長男・長女の個室を含めて「ここは私(○妻)の部屋」、「ここは僕(●夫)の場所」というふうに家全体がパーソナルスペースに分かれ、テリトリーに分化していった。

＜この住宅での分析とわかったこと＞

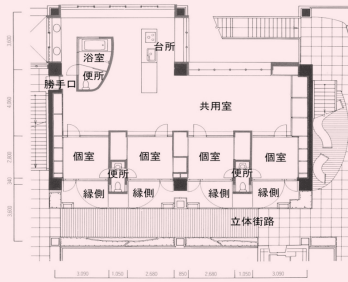
当初、ご家族はプライベートスペースとパブリックスペースに分離された設計を評価されていましたが、子供たちが独立後は家全体がプライベートな空間になり、その一方で夫と妻それぞれのパーソナルスペースがあちこちに見られるようになりました。このことから、エンピティネストの家というのは、広く暮らせるようになって、自分のコーナーや居場所が見出しやすいような計画が必要ではないかと考えられます。また、このご夫婦はそれぞれパーソナルスペースを持ちながら、基本的にはとても仲よく過ごされていたので、リビングルームがお二人のくつろぎの空間としてとても重要なものになっていることがわかります。

大きく変化したのは来客です。リタイア前は会社の部下やフォーマ

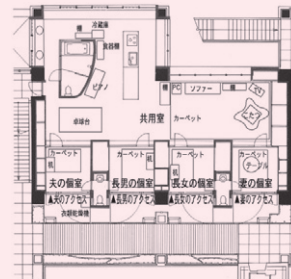
ルなお客さんも来られていましたが、リタイア後は、娘夫婦が遊びに来たり、息子さんが帰って来たりとプライベートな来客が多くなり、一緒にゆったり過ごせるリビングルームが非常に重要になりました。奥様の「リビングルームで何でもできちゃうのがいいわ」というコメントからも、やっぱり「手の届く範囲に何でもあって多機能なリビングルーム」「豊かなリビングスペース」というのが必要なのだと感じた次第です。

●第1フェーズ：C 家族の個人化に対応した住宅の検討

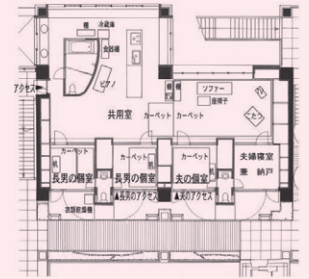
「自立家族の家」(設計:シーラカンス) 140.15㎡



社会と直接つながっているのは個人なのだから、普通のマンションのように玄関を入ったらまずは家族のリビングスペースに入って個室に入るのではなく、社会の空間からまず個室に入り、個室から家族の空間に入るのがいいのだ。つまり、従来の「社会→家族→個人」ではなく、「社会→個人→家族」という配列がいいのだという主張が今まで多くありました。このプランは、そのアイデアをそのまま空間に落とし込んだ住宅になっています。ここに住まれたのは40代のご夫婦と高校生、中学生のお子様です。



- ＜1年目調査結果:4人家族＞
- ・4人それぞれが個室を使い、外から帰ると各人が自分の玄関からアクセス。
- ・昼間は家に1人いる奥様が個室に限定されるのに違和感。



- ＜4年目調査結果:3人家族＞
- ・娘さんが家を出て、息子さんが2部屋を使用。
- ・阪神・淡路大震災後に、夫婦は1室就寝に変化。奥様は勝手口から出入り、個人作業は共用室に変わる。

＜この住宅での分析とわかったこと＞

1年目は、コンセプトに非常に共感して入居していただき、4人それぞれが個室を使い、外から帰ると各人が自分の玄関からアクセスされていました。そして、長男、長女、ご主人の感想は、住んでみて「社会→個人→家族」という空間の配列の意味合いがよく理解できると、一定の評価をいただき、ご主人は「ネクタイを自分で選ぶようになった」ともおっしゃっていました。

ただ、奥様に関しては、「昼間は誰もいない家で、何で私は家族全員の分の買物袋を下げ、自分の個室から出入りしなきゃいけないの。家全体が自分なんだから、あなたの個室はここだと限定されるのにはちょっと違和感がある」とおっしゃっていました。全くそのと

おりだなと思った記憶があります。

入居後1年ほどして、阪神・淡路大震災が起これ、それを境にご夫婦は一室就寝になり、奥様は勝手口から出入りされるようになります。これは空間配列の使い方の面から見ると、奥様はご自身で「社会→家族→個人」を選んで変更されたのだと理解できます。

4年目を迎え、このお宅に少し変化がありました。娘さんが大学に進学して家を出られ、ご長男が2部屋を使われるようになりました。

これらのことから、個人化した家族にこうした空間配列は適合しているが、同じ家族でも個人によって適合しない場合がある、ということがわかりました。

さらに、共通の玄関がないのはやっぱり困るとのことでした。個人化した家族だからといって玄関が要らないわけではありません。例えば宅配便の配達員さんはどこの玄関のチャイムを押せばよいのか。親戚一同が訪ねて来たら、誰の玄関から入るのか。こういう指摘があり、確かにそうだと思います。また接客時に、家族で接客する時は一体どこですのかという話になり、やっぱり接客空間は必要だと感じたのが結論です。個人化を志向しない人にも適合するような空間の配列が必要であることと、個人化した家族にはこのような空間配列の提案は適合していたのがわかったことが成果ではないかと考えています。

以上が第1フェーズの居住実験結果のまとめですが、第2フェーズの居住実験が始まった段階ではまだまとまっていたわけではなく、ずいぶん後から考えて分析したものです。

■第2フェーズ：2000年～

少子高齢社会における住宅の課題とは

第2～第3フェーズにかけて、「少子高齢社会における住宅の課題」は何だろうと文献調査などから考察をし、次の6つの課題を設定しました。

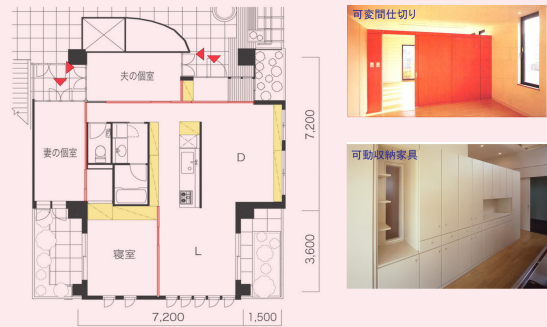
- ①子育て環境としての住宅
- ②高齢小規模世帯に対応した住宅
- ③家族の個人化に対応した住宅
- ④サービス供給の場としての住宅
- ⑤多様なワークスタイルに対応した住宅
- ⑥個人のネットワークに資する住宅

●第2フェーズの一例：

家族の個人化に対応した住宅の続き・リフォーム

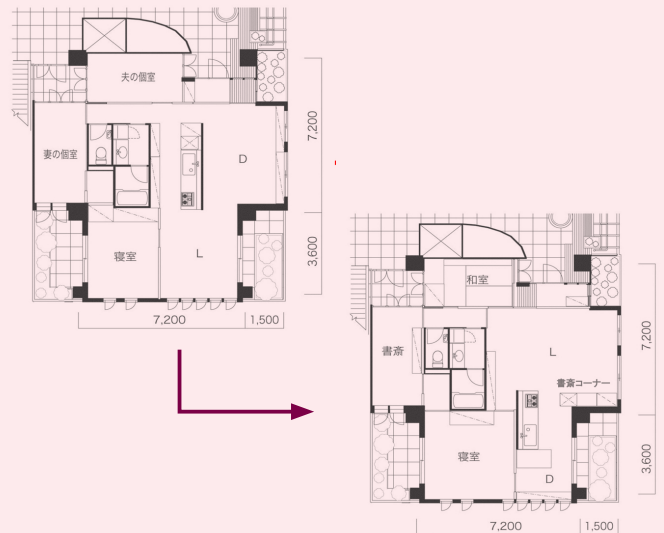
第1フェーズの続きとして「③家族の個人化に対応した住宅」に取り組みました。前回の結果を受けて、いろんな人に対応できるように、玄関はあるけれども個室からも入れる住宅をリフォームでつくりました。

この住戸の1年目では、ふだんは玄関から入り個室に行くという生



■次世代(家族)の家

活を送られています。奥様の妹さんが訪ねて来られることがあり、その時は個室に直接入って奥様と過ごし、場合によってはそのまま泊まり、個室から出ていくという使い方をされていました。また、ご主人の仕事上の関係者が打ち合わせに来られたことがあり、この時も個室に直接入って、そのまま帰られていました。つまり「社会→個人→家族」と「社会→家族→個人」の空間配列をうまく使い分けられていました。



この住宅も、可変間仕切り家具があり、リフォームをしています。ご主人の「個室という部屋より、書斎コーナーを」とのご要望で、ご主人の個室はゲストルームとして使える和室に変更。「玄関から入ったら、まずリビングがいい」とのお声で、ダイニングを奥に移しました。リフォーム後は、一旦リビングに入られたお客様が和室でくつろがれる、お客様が泊まれる、そういった行方も見られるようになりました。4年目の住まい方からは、接客に和室が加わったということや、夫が個室が要らなくなり、来客が宿泊できるようになる、こんな変化があったわけです。

それにより、ライフスタイルの変化に伴う個室ニーズの変化と空間配列の変更、使い分けといったことが確認できました。住戸における空間配列の選択性、もしくは変更可能性が家族にとっては有効であることが実証できたのではないかと考えています。

個人化の住宅の結論としては、「社会→個人→家族」の空間配列は個人化した家族には対応していることが検証できました。しかし、必ずしも個人化を志向しない家族構成員の生活への対応は必要であり、玄関や接客空間という家族のニーズも存在し続けるという

こともわかりました。そして、空間配列の選択性、変更可能性という機能に意味があると結論づけました。



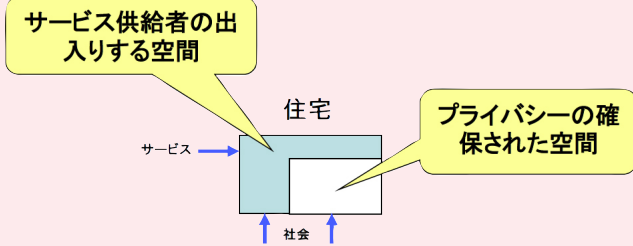
可変インフィル変更実験前

可変インフィル変更実験後

●第2フェーズ:それ以外の3つのテーマについて

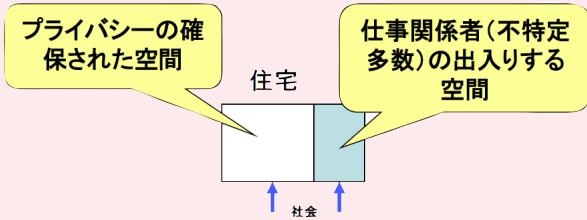
④サービスを受けられる住宅

実証実験はできていませんが、社会からサービスを受ける人へのサービスのための空間と、サービスを受けない他の家族のプライバシーやセキュリティが確保された空間がダブルで必要ではないかと考えています。



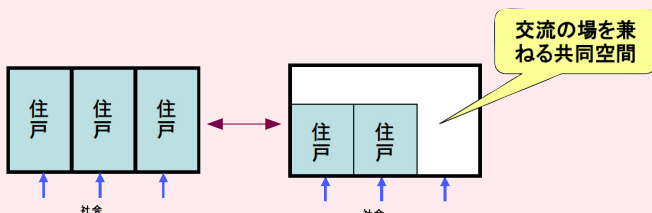
⑤多様なワークスタイル

仕事場に入り出す人たちとプライバシーが確保された空間、それにはやはりダブルで入り口が必要ではないかと考えられます。



⑥個人のネットワークに資する住宅

普通、住宅というのは家族と住戸が1対1で対応しています。しかし、例えば、同じ共同住宅に住む人同士や、個別の住戸でもネットワークしながら住むときに、共用の空間となる場所がある。もしくは家族だけれどネットワーク的に住んでいる。また、全く赤の他人が家族的に住んでいる。さまざまなネットワークのあり方に対応した居住の形態というものを考えないといけないのではないか。これは問題提起であり、こういった課題があると設定しているということです。



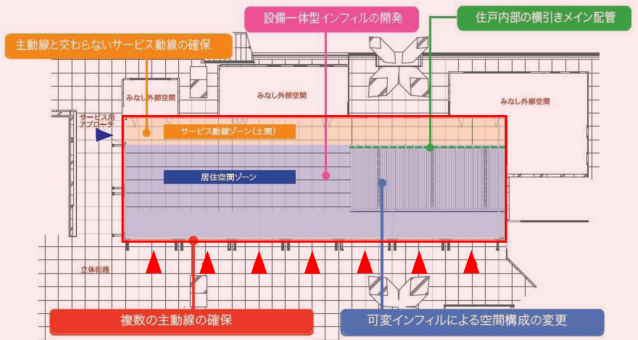
■第3フェーズ:2007年～

「住み継ぎの家」の提案

●こんな住宅だったらいいなという提案:

「Glass Cube (ガラス・キューブ)」

少子高齢化と環境問題の両方への対応をテーマに、アクセスを幾つかどこにでもとれる長いフロンテージがある空間を考えて、いろんなところから入れる住宅というのを実験しました。住戸の範囲は赤い枠の部分ですが、南側のどこでも出入口に設定でき、さらに北面からアクセスできる勝手口があり、オレンジ色の部分が裏動線となっています。

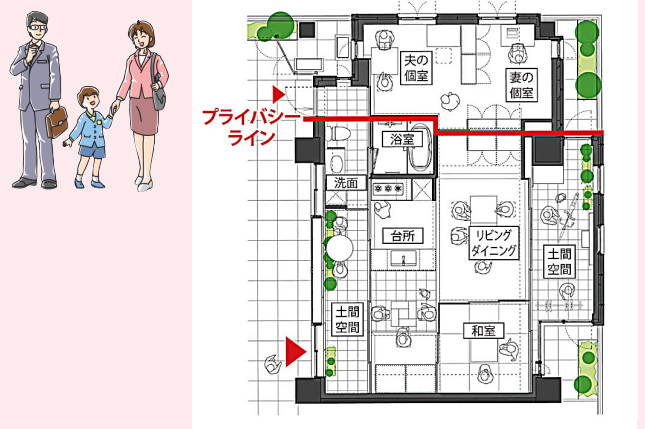


この住宅で可動間仕切り家具による実験を行い、その成果を反映して、実際に人が住む住宅としてつくったのが、「住み継ぎの家」です。

●「住み継ぎの家」の検討

可変インフィルを使って、次の3つの家族を対象とした住宅を考えました。

●1st 共働き子育て家族の家

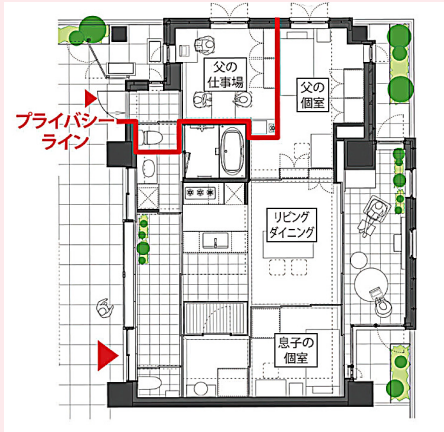


このプランのポイントは、プライバシーラインという提案です。共働きの場合はシッターさんが子供を連れて帰る。両親がいない家に帰ってくると、セキュリティもプライバシーもなくなってしまう。そこで、玄関には入れてもこの線より向こうには行けないというプライバシーラインを設ける提案をしました。といっても鍵をかけるだけです。シッターさんは子供の面倒を見ることができる側の空間について、プライベートな空間には行けないようにできるわけです。

●2nd 成人父子家族の家

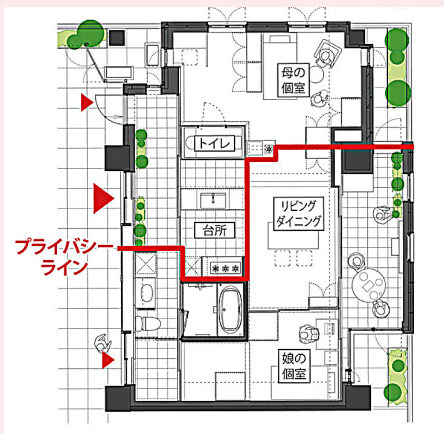
「共働き子育て家族の家」の可変インフィルを変更していくと、今度はお父さんのオフィスを組み込んだ「成人父子家族」プランになります。

リビングダイニングとそれぞれの個室があり、息子とお父さんは家族の玄関から出入りします。お父さんの仕事場への出入口はあるけれど、鍵のかかるプライバシーラインがある。息子はサラリーマンですから出ていく。お父さんはこのオフィスで仕事していますが、



今日は現場に行く。そうやってアルバイトの人だけがここに1人残っても、ここから向こうには行けないという鍵のかかり方をしたプライバシーラインがあれば、家族もスタッフも安心して過ごすことができます。

●3rd 高齢母子家族の家

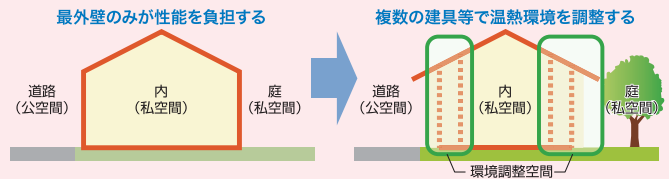


可変インフィルを再度変更し、水回りも若干変更して、今度は「高齢母子家族」プランを考えました。介護ヘルパーさんが来たとき、専用の入口から入りヘルプに必要な水回りだけを使うことができるという、プライバシーラインを設定しています。すると、ヘルパーさんはラインを越えて居住空間に行くことはできず、娘さんも安心して仕事に行ける、こういったプランです。

●環境調整空間の提案

「住み継ぎの家」では、外部と室内空間の重なる領域に環境調整空間を設けました。幅のあるダブルスキンの両側の建具の開け閉め

により、外部としても室内としても使える空間です。屋外と親和性の高い日本の居住文化を集合住宅に継承していくとともに、両方開めると断熱性能も期待できます。



●共働き家庭をヒアリングして

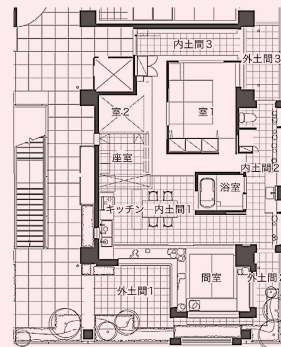
第3フェーズでは、NEXT21に居住する共働き家族へのヒアリングもまとめました。その結果、家庭のキッチンは奥様のマイキッチンではないこと、サービス業者も含めて、いろんな人が同じ一つの住戸内で家事をすることも考えなければいけないと思います。同じ経済層と考えられる共働き家庭でも就労形態や子供の年齢によって状況が大きく異なるので、個別的、短期的なニーズへの対応が求められていることもよくわかりました。

■第4フェーズ：2014年～

最後に第4フェーズの居住実験については下記となっています。

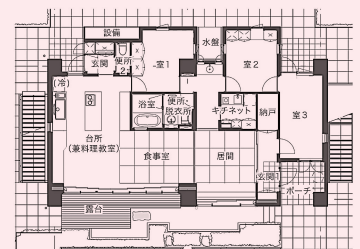
●余白に棲む家

竹原義二先生が設計して下さったプラン、学童クラブが開催できる空間がある住宅です。



●しなやかな家

近角よう子先生が設計して下さった料理教室を開くことができる家です。1室だけ貸せたり、2住戸に分けられたり、住戸が多様に分割できるのが隠れたテーマです。



「ライフスタイルの商品化 ～住宅産業での空間開発の変遷を通して～」

積水ハウス株式会社総合住宅研究所 部長※ 中村 孝之 氏

NEXT21がいつの間にか20年経ったということで、素晴らしいことだと思います。

今日は20年を振り返るということですが、実は50年くらい振り返り、住まいづくりの中で「ライフスタイルを振り返る」という時系列の話と、「ライフスタイルの拡がり」という2つの大きな流れがありますので、急ぎ足で進めたいと思います。

住宅の中で今一番課題になっているのは、高齢化ではなくて家族の形がばらばらであるということだと僕は思っています。2010年と2030年の家族構成のボリュームを比較すると、とにかく単身が全年齢層で増えていきます。本当に「住宅に一体誰が住んでいるのか」というところが、我々のように子育てファミリー、核家族を中心に相手にしてきた会社としては非常に大きな今の問題だと感じています。

また、一昨日の日経新聞では空き家率が13.5となっていました。7軒に1軒が空き家ということ。もう一つは、81年に「新耐震」がスタートしましたが、それ以降に建ったそこそこ使える既存住宅が何千万戸もあるわけで、本当に使える住宅を使う時代になってきたのではないかと感じています。

ということで、本日は改めて我々住宅産業がどんなふうにライフスタイルを提案してきたのかということ、大きく3つの時代くらいに分けてお話していきたいと思います。

※肩書は当時。2015年6月現在、生活空間研究室代表 / 株式会社アクタス 空間プロデューサー

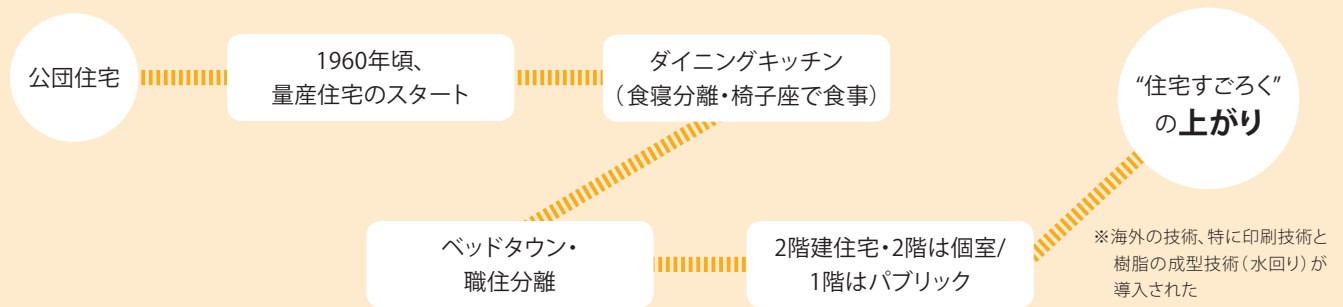


中村孝之氏 プロフィール

- 1979年 積水ハウス株式会社入社
- 2007年 同社 住生活研究所長
- 2011年 同社 総合住宅研究所ナレッジキャピタルGリーダー
- 2015年 生活空間研究室代表
- 2009年 都市住宅学会著作賞受賞
- 一級建築士、インテリアプランナー
- 滋賀県立大学・帝塚山大学・岡山理科大学講師 (非常勤)、日本インテリア学会関西支部副支部長
- 著書:「建築再生の進め方(共著)」<市ヶ谷出版>

戦後の住宅のスタート:ライフスタイルのスタート

「新しい住宅技術をつくりながら洋風の生活を提案していった時代」
象徴はダイニングキッチン



1 戸建住宅はプレファブによる量産住宅「木と土と紙の家」から、「鉄とアルミとプラスチックの家」へ
2 ダイニングキッチン+リビング 1960年椅子座の生活を導入=近代的な生活
3 郊外庭付きの二階建て住宅



住宅産業にみる商品開発の変遷

洋式の生活、新しい材料の空間

ボイラー、FRP浴槽、洗面室、洗面カウンター、クロス、ダイニングキッチン、陶器、プリント合板



デザインの時代:住宅デザインのラインナップが増え、インテリアの概念が入る

「ワンランク上の生活を目指そうという時代」
象徴は洋風のおしゃれな家

「デザインが広がって、住宅のバリエーションも広がってきましたが、ライフスタイルといっても、デザインを選んだり、洋風の生活を取り入れたり、まだそういうレベルの時期に、何とNEXT21が登場するわけです。素晴らしいことだと思います。この時代にライフスタイルというものを考えて、それが変わっていくこともよとして取り組まれたということで、本当に注目すべきものではないかと思っています」

使いやすく美しいインテリア
で生活のレベルアップ

憧れのライフスタイルの
提案(住宅産業の使命)

通産省がインテリア政策を強化。
インテリアコーディネーターを資格化。
暖炉のある家、おしゃれな洋風住宅(和室がある)、
マンションも“住宅すごろく”の**上がり**

NEXT21

90年代に入り、性能競争の時代へ

「インテリアやデザインより性能にお金をかける時代」
象徴は断熱性能やQ値

品確法(住宅の品質確保の法律)ができ、10個の性能に対する基準ができてきました。この中にいくつかの等級があるわけですが、基本的にその最高等級を目指すというのが住宅産業の使命になってきたわけです。私としてはNEXT21をやりたい、という思いはありましたが、業界としては免震システムやペアガラス、ユニバーサルデザインの開発というものを手掛けてきたのです。性能競争の時代に、住宅の性能は本当に高くなりました」

1981年 「新耐震」

1992年 「省エネ法」

1995年 「長寿社会対応設計指針」
「耐震改修促進法」

2000年 「品確法」

2006年 「住生活基本法」

サステナブルな時代:職住近接・生活へのこだわり

「ライフスタイル＝自分のこだわりを追求していく時代へ」
象徴は“住み心地”から“住み応え”

「自分のこだわりを追求していく時代になると、空間に目がいきます。積水ハウスの事例を1つ紹介すると、これはカスタマイズ賃貸という研究の一部ですが、入居時にほしい空間を選ぶという仕組みです。最近リノベーション、コンバージョンがかなり話題になっていますが、そういうふう空間をいかに自分らしくつくっていくのにか目が向き始めます。

ということで、高田先生*のいつもおっしゃられていることですが、“住み心地の時代”が、住宅性能が上がると、その次には、やっぱり住まいと人がどう関わっていけるのか、“住み応え”というテーマが最近非常に実感して聞こえています。この“住み応え”をいかに提供するかというライフスタイルの展開事例に入っていきます」

*京都大学大学院工学研究科 高田光雄教授

都市近郊・都心のミニ開発

職住近接

生活へのこだわり

暮らしを
実現する
家とは

“住み応え”を提供するライフスタイルの展開事例

「10年ほど前のことですが、『ライフスタイルって何だろう』と社内でアイデアを出し合ったところ、いくらでも出てくるんですね。ライフスタイルとは生活への力点から出てくるものだと思いますが、1人ひとり異なるため十人十色、百人百色のラインナップができる。そこで次に考えたことが『住まいに求められる役割』で、今和次郎の『生活の循環(生活学)』をヒントにしたものです。人というのは食べたり寝たりすること、家事をしたり仕事をしたりすること、ゆったり休んだりすること、こういう生活を繰り返しているんだと。その中で常に生活の場面ごとに異なるニーズが湧いてきて、もっとよりよく暮らしたいと思っている。こういう『生活のニーズ』に対して、よりよくしていくことが空間をつくっていく1つの拠り所にならないか、と考えて取り組んできました」

「寝る」:日々の生活の中で、もっとぐっすり寝たいというニーズ

「睡眠のメカニズム」を構成する要素、つまり体温の変動、メラトニン(睡眠ホルモン)の分泌、自律神経がいかに副交感神経優位になれるのかなど、生体のリズムを自然のリズムとの相関で考えて空間づくりをしていこうという研究をしました。

高齢になっていくとととと睡眠の質が悪くなっていく。10歳くらいの子供はぐっすり寝ていますが、高齢になってくるとグラフの青いところが示すように、ばらばらにしか寝られていないということで睡眠深度が浅くなります。A これをいかに深くしてあげるのか。そこで、自然のリズムに基づいて光は低照度・低色温度に、少し室温を下げてあげます。というのは寝ると体温が下がるので、室温は上げるよりも下げるほうが良いとわかってきたからです。おやすみモードになると、光が、その後に音楽がフェードアウトし、眠りに入り、起きるときにはまず音楽が鳴り、その後におよそ1000ルクスの



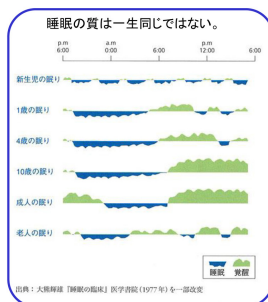
夜はくつろぎの空間で誘眠



朝は明るくさわやかに

A

年齢によっても、眠りは変わる・・・



睡眠の質は一生同じではない。

光を当てて目覚める。こういうメカニズムを基に空間をつくりました。これは夫婦2人を想定し、例えば1人がおやすみモード、もう1人は本を読んでいても互いが快適なように光の制御を取り入れた就寝室の1つの提案となっています。

「休養」:犬や猫のペットと暮らすニーズ

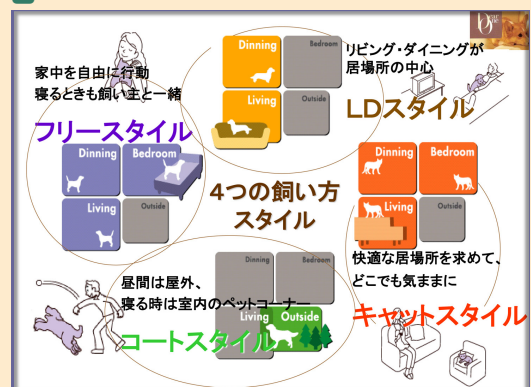
休養については、ペットとゆったりと暮らすニーズに着目しました。10数年前から話題の、家の中でペットと暮らすというライフスタイルをどう実現するのかをテーマにしたものを紹介します。

犬と猫を飼っている人は戸建て住宅の4割以上、今はもっと多いと思います。そのときに「どこで飼うか」で4つの飼い方スタイルに分けました。「フリー」というのは家中どこでも。「LDスタイル」というのはリビングダイニング限定。「キャットスタイル」は猫ちゃんの勝手気ままに暮らすスタイル、また「コートスタイル」は主には外で飼うというスタイル。そして、ペットのサイズによってペット対応のアイテムをいろいろ使い分けてつくっていきました。

開発の一例として、滑らない床を開発し、畳のような洋室の床をつくりました。これは実は素足で歩く日本人にとって理想の畳を洋室に置き換え、しかも性能を出すにはどうしたらいいのかと考えて、言ってみれば布みたいな太い繊維で織った平織りをベースにした、少し防水性能のある床材を東りさんと一緒に開発したという経緯があります。そういう床にしないと、ワンちゃんは床板だと滑って股関節脱臼を起こしたりするので、犬の飼う場面では絶対に役に立ち、しかも高齢者の人が歩いても安全だという床をつくりました。

それから、3つ部屋がありますが、ペットのための部屋です。訪問調査をすると、ペットの餌とかお水が廊下に置いてあり、それを家族が蹴っ飛ばしたりして大変なことになっているという話をよく聞いたからです。それであれば、ちょっとしたアルコーブをつくってペットの居どころにしようと考えました。1つが上に換気扇がついたペットのトイレ。真ん中にご飯を入れると上から照明がつくダイニング。左端は寝室でウォーマー用のコンセントがついています。B 一方、勝手に遊ぶ猫ちゃんには、リビングルームに人も猫ちゃんを楽しめる壁をつくりましょうという提案です。猫には縦に登っていく空間というのが一番うれしい。猫は自分のテリトリーをつくります

B



4つの飼い方スタイル

から、この縦空間をちゃんと自分の居場所にして遊んだり、少し高いところから人間を見おろしたりしている。そんなペットの遊んでいる姿を眺めるというのがリビングの楽しみなんだ、というギャラリーホールをつくりました。これもなかなかの人気商品です。



犬と一緒に暮らす



猫と一緒に暮らす

自然を眺めること自体をインテリアにした「内外一体空間」

リビングルームってどうすればゆったりくつろげるんだろうという問いから始まりました。どうも日本の住宅、日本の座敷というのは、高い軒、低い天井、そして横幅の広い開口でできていて、座敷に座ると空間のインテリア自体はそんなに凝っていないけれど、庭に開いている。庭がそもそもインテリアと同化していて、自然を眺めるということ自体がインテリアじゃないか、と考えたんですね。これを今の住宅にうまく実現できないものかと。そして、それを実現したことでいかにリラックスできるのかのエビデンスをつくりたいと考えました。

この画像は京都の円通寺です。実はグランフロント大阪ナレッジキャピタルにある「大阪市立大学健康科学イノベーションセンター」のセンター長をされている渡辺先生のところに「こんなことを評価したい」と相談しに行くと、「円通寺がいいんじゃない」とアドバイスいただいたのです。そこで、実際に円通寺で評価もしました。C

疲労測定ですが、自然と一体になった積水ハウスの新しいリビングルーム「スローリビング」と、インテリアデザインを施した積水ハウスの一般的なリビングルーム「リビング」の2部屋で疲労回復効果を測定しました。

たくさんのデータから、「加速度脈波」というグラフをご紹介します。疲労負荷をかけた前後の脈拍を測定して疲労度の測定をした試験ですが、自然を感じる「スローリビング」で休むとリラックス度が元に戻り、通常の「リビング」では戻っていないことがわかってきました。このようなエビデンスをつけて、やはり日本人にとってく

つろげるのはこういう「内外一体」のリビングではないか、ということ提起したのです。

こういう「新しい中間領域のスローリビング」をつくり、グッドデザイン賞をいただきました。ただ、やっぱり横幅の開口部が必要なので、きちんとした構造が重要になります。このリビングルームをつくるために、積水ハウスの構造にも新たな技術を取り入れて非常に丈夫にしています。



新しい中間領域「スローリビング」



GOOD DESIGN AWARD 2011

「2011年度グッドデザイン賞」を受賞

「シアター@ホーム」

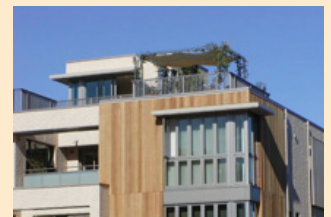
リビングルームについては、それ以外に「シアター@ホーム」として、リビングルームがシアターになるというものをつくりました。これは大音響を出さなくてもそこそこいい音が聴ける5.1チャンネルの技術をうまく取り込めば、ある程度の防音を入れるだけで外に音があまり漏れないで音楽が楽しめることがわかってきたことから生まれた形です。D

「菜園ボックス」

屋外に生活空間をつくるという、人気のある提案なのですが、ボックスの中で野菜ができる「菜園ボックス」を使った屋上の家庭菜園です。最近ウッドデッキを敷かれる方がすごく多いですね。これはウッドデッキの上で野菜づくりができるということで、スリッパのまま出て行って野菜を摘んできて、キッチンでそのまま料理ができ



菜園BOXシステム



3階建て住宅の屋上にもうひとつのリビングをつくらせて4階建てに

C

日本の伝統的な空間の心地よさを見直す

伝統的な住まい 縁側などの屋内と自然をつなぐしかけて、季節の変化を感じ、寒暖の差を受け入れながら暮らす

現在の住まい 気密化が高まり、空調による快適性が向上
住宅内外が分断され、自然との関係性は薄い

それぞれの良さを融合できないか

低い天井、深い軒、広い開口

伝統的な空間構成の例

円通寺(京都市)

伝統的な空間構成の例 円通寺(京都市)

伝統的な空間構成の例 円通寺(京都市)

D

リビングルームがコンサートホールになる
Theater @ home

リビングルームが

スタジオリビング

本格的なスタジオを持つ

防音技術

シアターになる

シアター@ホーム

シアター@ホーム

第1回「住まいのライフスタイル研究」

るという非常に楽しいライフスタイル。しかも子供と一緒に野菜づくりが楽しめるという利点もあります。

「子育て」の視点

住まいに求められる役割では家事や育児は義務的活動に含まれていますが、最近はどうもこれをいかに楽しくこなすかが1つのポイントになっているようです。積水ハウスでは子供との暮らしを「子育て」という義務的な活動にせず、「子育て」の視点からとらえています。子供は生まれた時から、自らの力で育っていこうとする能力を持っている。その生まれた時から持つ能力を伸ばしてあげれば、自分から自立していけるようになる。それをサポートしてあげればいいんだ、家も子育てに役に立つんだという発想で家をつくるということを研究開発してきました。

子供は感性、身体、知性、社会性、4つの力を身につければ自立していくんだということを基本の考え方にしました。そこでまず五感を発達させ、それから体の基礎づくりをして、その後知性を、さらに社会性を身につけさせていくというプロセスを間違えずに踏んでいけばちゃんと自立していくんじゃないかということを考えてつくりました。これはピアジェやエリクソンをはじめとする既往の研究、今日お越しいただいている北浦先生の研究も参考にさせていただいて何とか編み出したもので、住宅の空間が子供の育ちに役に立つことがあるんだということをつかっていったわけです。

子供はリビングルームから育っていくということで、大体よくいる場所というのは中学になるまではずっとリビングルーム。むしろ個室にすることが少ないということがわかってきたので、リビングルームにまず子供が育つための仕掛けをたくさんつくろうと、こんなふうにつくりました。

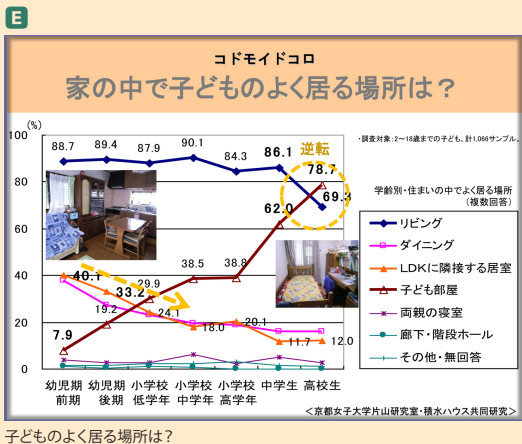
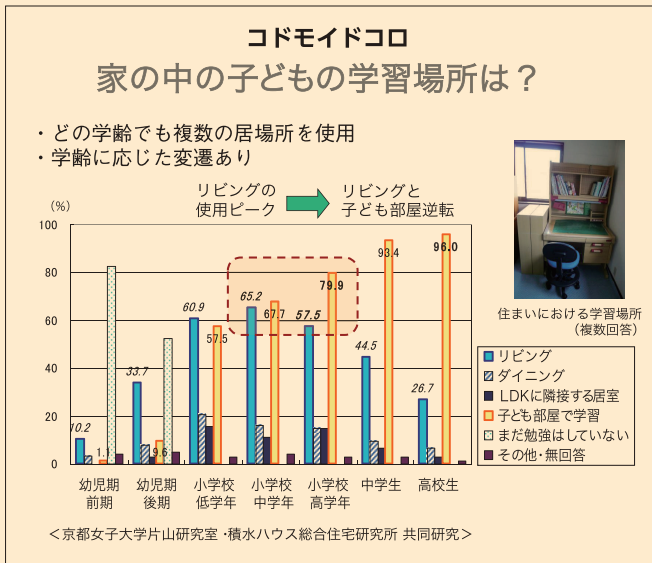
2段ぐらい高い子供の遊び場だとか、お母さんも子供も勉強したり仕事したりできるようなファミリーステーションという机だとか、あるいは絵を描きながら家族で会話ができるドラフトウォールという壁だとか。また、おもちゃ収納など、いろんなものをつかってリビングの周りに子供の居どころをつかってあげる。自分からその場所で1人で遊んでも安全であるのは当然で、家族で楽しく過ごせる居どころをつかっていったということです。

子供の勉強の場所についても、小学校の間はリビングルームが圧倒的に多いということで、訪問調査をしても、個室に勉強机が置いてあっても、小学生の子は勉強はダイニングでやっていることが多い。ということで、先ほどのような勉強機の空間をつくったことで、お母さんの横に子供がやってきてランドセルを置いて勉強を始めるというシーンが生まれるわけです。ちなみに、絵を描きながらしゃべるといのは、右脳と左脳を両方使うので脳の発達にはすごくいいらしいです。E

親子が寝る場所

寝る場所ですが、住宅メーカーのモデルプランでは大体、子供部屋2つと主寝室1つをつくるんですが、プランどおり寝ている人はほとんどなくて、子供とお母さんが一緒に寝て、お父さんは別室で寝ているとか、家族全員が同じ部屋で寝ているとかと、どうも予定した個室で寝ていることがないことがわかってきました。

そこで、じゃ、個室は可変間仕切りで自由に変えられるようにしようということにしました。可変間仕切りですが、子供でもゴロゴロと動かせる収納を開発して、特許をとりました。先ほど高田先生がご紹介されたパズラインに対抗したようなものを作ったのです。自由にこの個室を間仕切ること、主寝室と子供部屋2つのプランを入れ替えることができるようにすると。これは結構人気の商品なので、ぜひ皆様ご検討ください。という営業的になってきました(笑)。F



シニアの暮らし

シニアの暮らしですが、「高齢者は何歳ですか」とアンケートで尋ねると、大体4割くらいの方が70歳以上、また75歳以上と答える人も多くなってきています。65歳は高齢者じゃないんだということですね。そういうアクティブシニアの間で、近所の人とうまく交流しながら暮らしたいというニーズが非常に高くなってきています。

自宅に人を呼んでもいいんだと思っている。それから、新しいことに挑戦したいとか、あるいは自分の趣味の部屋を持ちたいとかいう非常にバイタリティのある人も増えてきているということがわかってきました。



プレミアムな書斎 & ライブラリー
家で仕事を続けてみる



プレミアムなパウダーコーナー
お出かけ時のセンスアップ感覚が心地いい

そこで何が必要なのかというときに、まず1つは自分の居どころをつくってください、ということ。夫婦2人一緒にずっと顔をつき合わせているとしんどいですよ、まず自分の居どころをつくることから始めましょうという提案をしています。

それから、夫婦の居どころも大切ということで、リビングルームをつくるよりはダイニングルームを重視して、ビッグテーブルを置き、夫婦2人が思い思いの場所に座って別々のことをしていても、つながっているというような状況をつくったほうがいいですよと提案しています。

また、地域の人とつながる。これは自宅中心の生活になると重要なことで、庭やウッドデッキの空間をオープンガーデンにするなどして近所の人を招くようにしたいものです。最近夫婦2人になってから家を建て替えたいという方が多くて、実は平屋を建てたいと。積水ハウスでも平屋の数が増えているんです。夫婦2人なので家は平屋でも自分たちの空間を大切に、庭にも人が集まれる空間があるといいと思います。

このおうち、和室だったどこかの一部屋を改造してカフェを始めたいですね。また、このおちはバイクを置けるようなガレージをつくっています。そこに椅子を置いて、バイク仲間が集まるといった

使い方をされています。そんなことで、結構近所の人たちが集まってくれる空間ということも大事だということです。G

ということで、これからはどうも住宅そのものではなくて、どんな暮らしをするのかということの販売していく時代になってきたんじゃないかということです。

これはちょっと見にくいですが、「住ムフムラボ」。うめきたグランフロント大阪ナレッジキャピタルにある「住ムフムラボ」という、積水ハウスが、自分にふさわしい住まいや暮らしのテーマを発見してもらいたいと考えて作った新たな施設なのですが、ここに15個の暮らしのテーマがありまして、どんな暮らしを取り入れてみたいかというアンケートをとっています。先ほど紹介したような「スローリビング」とか、「大人HOUSEの書斎」だとか、あるいは「インテリア」や「ガーデン」などは人気が高いですね。

一方でペットやガレージや仕事場にこだわる人はそんなに多くない。しかし、取り入れてみたい人が多くないテーマのほうが実はライフスタイルとしては結構おもしろいことができる。欲しい人と欲しくない人がはっきりしているテーマは、欲しい人は本当にこだわりのあるものが欲しいと思っているのではないかと思います。私はスローリビングやキッズデザインなど多くの人に取り入れてほしいものもつくりましたが、意外に人によってこだわりが強いテーマに当たっていくという時代になってくるのではないかと思います。

住宅は、これまででは“すざろく”の上がりに向かって、他の消費財とは別の財布からお金が出ていましたが、こうやって暮らしをよくしていくニーズが高まってくると、家も、生涯学習も旅行も健康づくりやスポーツも全部が、「自分が暮らしを豊かにするためにどこに投資をするのか」という選択肢の1つになってくると思います。

なので、「コト消費」から「意味消費」と。最近コト消費とよく言われますけども、コトを買うだけではなくて、そのことが自分にとっていいのかという自分にとってのそのストーリーの価値、つまり意味を買う。何でこれが必要なのかという意味があったり、自分から発見していくプロセスがあったり、そんなことが住まいへの投資につながっていくのではないかと思います。

G

大人ハウス “間”

仲間・地縁とつながる居どころをつくる

一部屋を開放してカフェを始めよう

子ども孫家族や友人が集まる空の下のダイニング
自慢料理があれば、人を呼びたくなる

趣味のガレージ空間にも居どころをプラス。

仲間・地縁とつながる居どころをつくる



「住ムフムラボ」
ナレッジキャピタル4階

今日お話しした住まいや暮らしを発見できる展示、また関連する本が2500冊くらい。カフェもありお茶を飲みながら本が読めます。「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」という真っ暗闇の中で住空間を体験し、対話するプログラムもあります。

「住ムフムラボ」空間構成

討論会

コーディネーター

高田 光雄 氏

(京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授)



【高田】 私は、NEXT21には、企画や設計段階から関わっていますが、1990年からですので、既に四半世紀がたっています。

このシリーズでは、長く続けられてきたNEXT21の居住実験を題材に研究報告やディスカッションを重ねていきます。今日は、その第1弾として「ライフスタイル研究」を取り上げます。まず、加茂さんに、ライフスタイル研究の立場から20年間の居住実験のダイジェストを報告していただき、その後、中村さんに戦後の住宅デザインの流れの中でライフスタイルがどう扱われてきたかを論じていただきます。

フロアには蒼々たる方々が来られています。後ほどご意見を賜ればと思います。報告への質疑に加えて、「ライフスタイル研究」のあり方へのご意見、NEXT21居住実験へのコメントなどをいただけたら幸いです。

「玄関の意味とシェアハウス・新しい“家族”の形」

【マツオ】 京都から来ましたマツオと申します。僕は京都府建築士会の取材と研究を兼ねて、京都の寺院の庭園と建物の関係を時代の変遷を追いつながりながら取材しています。その中でどうやら南禅寺の大仙院という塔頭から日本の玄関が発生したらしいことや、先日、高田先生のところの研究室で、韓屋(はんおく※韓国の住宅)の研究発表で、韓屋にも玄関がないと知ったので、加茂さんのお話を伺い、今後は玄関のない住宅というのを1回設計してみたいなと考えています。

それと、もう一つ。加茂さんのお話の中で、家族の形の変化ということが出てきたお話ですが、京都の高田先生が主宰されている研究会でもシェアハウスの話を伺いました。まさに家族の形そのもので、血縁関係でない、ある意味家族を1つの建物の中でつくっていくという新しい試みの萌芽のような気がします。その中で実際に運営されている方々にお話を伺ったところ、そのシェアハウスがうまく運営されているかどうかは、「どれだけ皆さんがリビングを使われているか」「個室に引き込まれてないか」ということが判断の指標になるそうです。そういう意味で、これからの未来の血縁関係でない家族の形と居住スタイルというのがすごく今のNEXT21の実験とつながって、1つの答えが出そうな気がしました。

【高田】 前半の話は、玄関がないというより、履き替え線が長い、つまり、あちこちから出入りできる家に意義があるということですね。

「住宅産業の持つ知見の生かし方、海外展開について」

【コニシ】 コニシと申します。お二方に質問したいのが、積水さんは50年、大阪ガスさんは20年とそれぞれ非常に多くの知見がたまっていて、それらを社員の方にどういうふうにフィードバックされているのでしょうか。研究されている個人の方もご自分の生活にどう生かしていけるのかも伺いたい。

もう1点は、時代の変遷において日本の住宅が、耐震や防犯やいろんな面

で非常に性能が上がっているという話があり、そうなるとう当然のことながらアジアの諸外国に輸出産業としても出てくるとか、性能が評価されて市場が海外に広がるということもあると思うんですが、そのあたりお聞かせいただければと思います。

「NEXT21「個人化の家」の第1回の居住者として思う」

【モリ】 私は加茂さんの発表にありました「個人化の家」の第1回の居住者、モリと申します。ネクタイを自分で選ぶようになったのは私でございます(笑)。社会から個室へ入って、シェアするリビングに入るというこの動線のとり方に非常に共感しました。まさに、自分が帰ってきて家に入るための準備をする、ある意味、個室は楽屋みたいなもので自分の思考が変わるということに、これはおもしろい。子供たちもそう思ったようです。ただ、ああいう家に住むというのは家族構成だけでなく、家族のまとまりやコミュニケーションによって結構左右されるのではないかなと。うちは割合まとまりがある家族で、住居へ入ってからは余計そうだったかなと思うんです。でも、そうでない場合は、余計別々になるのではないかと。人間の中身みたいなところも考慮していく必要があると思いました。

「NEXT21へのリクエスト、外出先からのセキュリティ管理」

【ヨゴ】 ヨゴと申します。私は次のNEXT21へのリクエストとして、先ほど住まい方の実験の「住み継ぎの家」で、セキュリティラインを作りプライバシーのゾーンを守る住宅をさらに発展させて、家事をアウトソーシングしている、それが簡単にできる家の居住実験みたいなことができないのかなと。例えばセキュリティラインの開け閉めを外部から管理して、ヘルパーさんが来ているのをライブカメラで外から見て、安心して働きに出られるとか。セキュリティはスマホで外から操作して時間で電気錠をかけるとか、そういう取り組みを考えていただけたらという単純なお願いです。

【高田】 皆さん、どうもありがとうございました。それでは、お二人にコメントをいただきたいと思います。

講師:加茂さんからのコメント

- マツオさんへのお答えですが、履き替え線が長いということに関しては、玄関が1つしかない、お客さんによってどこまで引き入れるかというコントロールが全然できないねというような議論がありました。それで、履き替え線を長くすることによって外部から入ってきた人がどこまで入るかのコントロールをするという発想が、今日ご紹介した住宅に組み込まれています。
- コニシさんからいただいた会社の中での情報共有のお題ですが、適

宜このような機会を捉えて共有したり、あと、公開時には内見会をして、まずは社内の人間が見て、それから社外の方にご案内したいと思っております。あと、自分の生活での生かし方ですが、私は今日実はシッターさんを頼んできたんです。娘と息子がいるのですが、以前はシッターさんに頼むのを躊躇した部分がありました。ところがセキュリティラインの研究をした後、自分の家のマンションの1室に鍵を後付けしてもらったところ、貴重品は全部その部屋に入れておけば何かなくなってもあらぬ疑いをかけることもなく、安心して過ごすことができます。今日も、朝その部屋の鍵をかけて家を出ました。そういう意味ではセキュリティゾーンというのは、例えば訪問ヘルパーさんとかシッターさんなどを頼むときはとてもいいんじゃないかと思えます。だから、事例のようにアクセスコントロールしながらセキュリティラインを考えると、これまでやらなくても、1室に鍵がかかるだけですごく安心感が高まるというのを感じています。

- モリさんがおっしゃっている、その人の中身によって違うというのはよくわかります。以前、住宅と人がどう関わるか、関わりの深いほど非常に満足度が高いという研究をしたことがあるんです。例えば入居したときに置いた物が5年後もそのまんまの方と、いつ行っても絵や置き物が変わっている方では、総じて変わっている人のほうが満足度が高い。だから、家に関わることが愛着度を増すのではないかと思ったんですが、ある一部の方からは「横着な人ならいじらない。ずぼらな人が全員家に不満か?」と指摘されたことがあります。本人の資質や要素で変わってくることは、特に質的研究だとか一点調査、一例調査では考慮しないといけないなと考えています。
- ヨゴさんのリクエストは、すごくお金がかかりそうですが、ちょっと考えてみたいと思います。

講師:中村さんからのコメント

- マツオさんのコメントです。NEXT21では実験的にいろいろやっていたのですが、玄関はやっぱり住宅を設計していく中では、防犯ラインと断熱ラインの両方を確保することが今のところは大事なものでしょう。庭先から入ってくるようなプランニングが、実は最近お客様の方から望まれていて、玄関を使わずサッシが出入口になっているようなプランニングが増えていることは確かです。特に先ほどのアクティブシアアの平屋の家などでは、日本人のDNAにそういうものがあるんじゃないかなと思います。
 - コニシさんのご質問ですが、住宅産業に携わっているとはいえ、皆さんが今注目されるほど決して豊かな住空間を皆が享受しているとは思えません(笑)。しかし、やはり社員には住まいに関心を持ってほしいと思っているので、社内で住宅の変遷の話をしたり、会社の周年史にそういう歴史を編纂して社員全員に配ったり。それを最近ではeラーニングで勉強しろとかそういうことも載せたりして、伝達する機会をつくっています。
- 海外については、まさに今各社とも展開中で、積水ハウスの場合、中国とシンガポール、オーストラリア、アメリカなどに主にデベロッパーとして展開しています。住宅産業というのは箱をつくる、器をつくるビジネスモデルなので、日本での着工戸数が減ってくると海外でも器をつくりたいわけです。うちも例えば中国では工場をつくり、自社の技術を持ち込んで住宅を建てるというような、技術とか性能を全部海外で展開できるようにってきているんじゃないかと。特にこれからそういう技術

が欲しい国というのがあると思うので、器づくりの部分ではそうなるし、きょうのお話のように国内ではそれこそライフスタイルづくりの部分をもっとやっていかないとけない、難しい時代になったと思えます。

先ほどの家事のアウトソーシング化のお話はおもしろい。歴史的には住宅の中で生活の機能が外部化したり内部化したりしていつている。農耕の時代には住宅はほとんど仕事場でしたが、サラリーマンが主流になり職住分離になって、多くの家では仕事が無くなった。ところがまた、最近では家で仕事するような働き方、在宅勤務が企業で推奨されるようになってくると仕事場が復活する。あるいは自宅ですできるだけ長く住み続けたいということで医療や介護も内部化していつたり。その代わりというわけではないが、家事や育児は外部化していつてる。これからも住宅の機能は出入りするでしょう。家に何が入ってくるのかによって、先ほどの防犯だとか、ICTの仕組みがどんどん必要になってくるといけないかと思えます。それにより住宅の形やプランニングは変わっていつていいなと思っています。

【高田】ライフスタイルは、もともとはマーケティング用語で、1980年代に住宅研究に入ってきた経緯があります。中村さんがあえて生活スタイルと書いておられたのは、それと区別しようという意図があったのかもしれませんが。第4フェーズの企画に関わられた経験のある広告代理店の博報堂のハヤシさんに、コメントをいただけたらと思います。

【ハヤシ】私も建築の出なのでNEXT21のことはもともと存じ上げていました。僕たち、ライフスタイルという言葉を使っていたんですが、一緒にNEXT21の仕事をさせていただいて「住まい方」という言葉を使うのが会話の中で多かったかなと思っています。先ほど中村さんがおっしゃったように、「部屋の使い方をこういうふうにしたいと設計されてもそう使われていない」みたいな、供給側と実際に住まれる方との差分というのがNEXT21の中に結構いっぱいあったと思うんですね。それを加茂さんが居住者の奥様と長時間話されて、そこから拾い出していったという手探りみたいなところというのは、今まで取り組みされていなかった部分かなと思っています。そういうところを少しお手伝いさせていただいて、NEXT21で実体験で今までいろいろ研究されてきた中で、ライフスタイルという一般用語ではなく、「住まい方」という言葉がしっくりきているのかなと思っています。

【高田】先ほどのモリさんからのご指摘にも関連しますが、NEXT21の居住実験は、1つしかないサンプルを調べる一例研究です。統計的な分析ができない事例研究の意義については批判的な議論もありますが、加茂さんは、実はこの一例研究をベースに京都大学で博士学位を取得され、都市住宅学会の博士論文コンテストでも優秀賞を受賞されました。学会でもだんだん一例研究の意義が徐々に認められつつあるのですが、多数のサンプルに共通する法則性を見つけないというより、個別事例の持っている意味を深く問うことの重要性が住居計画の領域では問われています。ただ、先ほどモリさんにご指摘いただいたように、観察した事実の意味を深く問い、それを相対化して考察することも重要です。中村さんが、モノを売る時代は終わり生活スタイルを商品にしていくといわれたのは、その裏返しのご指摘と理解できます。ありがとうございました。

大阪ガス株式会社

エネルギー・文化研究所

リビング事業部 計画部

〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2